僕が落ちて消えるまで

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕が落ちて消えるまで

【Ｎコード】
Ｎ２０３２ＢＡ

【作者名】
屋下雨宿

【あらすじ】
校舎から落ちて死んでしまった生徒の話。

僕が落ちて消えるまで（1）

二人の生徒が薄暗い校舎の階段を駆け上っていく。一人は僕で、もう一人は彼女。

計一四段の階段を上りきって素早く切り返すのは先を行く彼女。名前は、佐竹鈴子（さたけすずこ）。この高校の三年生で生徒会長を務める優等生。サラサラのロングヘアーを靡かせながら、ミニスカートの中など気にせずに一段飛ばしで大胆に上っていく。

切り返しの度に、一段分ぐらい離されていくのが僕。名は芦馬圭太（あしまけいた）。同じく高校三年生。僕は生徒役員とか言う訳ではなく、ただの彼女の彼氏。うん。とてもいい響きだ。鈴子の彼氏。

え～と……まぁ、それ以外には取り立てて自慢できるような特徴がないのが特徴の普通の高校生である。

「早いって！」

「急がないと間に合わないでしょ！？」

僕が声をかけると、何故か彼女は更に速度を上げる。それを見上げた僕は慌ててしまい、階段に足を引っ掛け倒れそうになった。

「うわっとと……」

それでも、なんとか堪えて彼女の後を必死で追いかけた。

鈴子はそんな僕に気を配ることもなく階段を上っていくと、階段

を上りきるその手前の踊り場で足を止めた。そこから遅れる事、三秒弱。彼女に追い付くと、荒くなった呼吸を整えてから、階段の途中で立ち止まった意味も知らずに、

「それで、どうするつもりなのさ？」

と言いながら、顔を上げる。そして、目の前の物体に驚愕した。

そこには壊れた机とか体育祭・学園祭の小物などが山積みにされていた。無理やりに積み上げたであろう部分もあり、ちょっと下手をしたら崩れてしまうのではないかと思うほどの不安定さ。それは僕達の侵入を拒んでいるようにすら見えるぐらいだ。

「うげ。す、進めるのか？これ」

「だから、無理してこなくてもいいのに」

鈴子は僕に気を使う様子もなく、小道具に足を掛けるとそれらを思いっきり踏ん付けて進みはじめる。僕もちょっと躊躇いながら同様にして道具の山を登り越えて行った。

僕達の目的地はその先に見える侵入禁止と書かれた扉。その向こうにある屋上だ。そして何故、屋上を目指しているのかというと、そこに一人の生徒がいるからだ。

ただいるだけなら大した問題ではない。廊下・階段を走っている僕達と同レベルの罪だろう。

しかし、そんな些細な問題ではない。屋上には今にも飛び降り自殺をしようとしている生徒がいる。

これは緊急事態なのだ。だから、生徒会長である鈴子はこんなに急いでいる。何とかして、それを阻止しようと必死なんだと思う。

高校全体がざわついてきている感じはあるが、まだ甲高い悲鳴は聞こえてこない。まだこの先にいるはずだろう。

気持ちを入れ直して、大きめに歩幅をとった時だった、

ベキッ！

足元で嫌な音がする。次に起こるであろう事態の予測は付くが、対応は出来ない。出来た事といえば、咄嗟に目を瞑る事ぐらいだ。

足が沈む。だが、僕がそれ以上落ちて行く事はなかった。不思議に思い眼を開けると、鈴子がその腕を掴んで支えているのが見えた。

「あ、ありがとう」

引っ張り上げてもらった僕は、視線を逸らしながらお礼を言う。逆の立場なら格好は付くのだろうが、これじゃあ見っとも無いだけだ。

「だから無理しなくてもいいって」

「ほら、だって俺、男だし？」

「理由になってない」

些細な強がりをして見せるが、鈴子は呆れた様子で冷たく言い放つ。

「えーと、だな。大体、どうやって止めるのか考えているのか？」

「知らないわよ。でも、生徒会長として何もしない訳にもいかないでしょ！？」

扉の前まで辿り着いた鈴子は、二の腕に巻き付けられた腕章に手を添える。

「まずは対策を考えよう。可部井さんを刺激しないようにだな……」

「それじゃあ、行くわよ！」

「優しく声を掛けつつ、援軍を待とう……って、おい！」

そんな僕の話などはまるで聞かずに鈴子は勢いよく扉を開ける。夕焼けの射光が眩しくて、僕は思わず顔を逸らした。

「自殺なんてやめてこっちに来なさい！」

威勢のいい第一声を放つ。鈴子の癖なのだろうが、やや威圧的過ぎると思う。

扉の向こう、屋上のフェンスを越えた先。少しの足場とも呼ばないぐらいのスペースに茶髪の女子生徒が見えた。情報通り。名前は可部井千代里（かべいちより）。三年生。一年からずっと同じクラスで多少は話した事もあるが、目立たない地味な子だ。

可部井さんは一度鈴子のほうを向いてから、何も言わずに視線を前方に戻す。僕は扉の影に隠れていたが、僕の姿も見えたのだろうか？

「今そっちに行くから！動かないでよね！」

問答無用で駆け出す鈴子。こういう時って、ゆっくりと近付くの

が正解じゃなかったっけ？

一気に距離を詰めると、フェンスをよじ登り可部井さんの隣まで行こうとする。可部井さんの注意もそちらに向けられており、鈴子から離れるように後退る。

今のうちに気付かれないように背後に回り込もう。僕も屋上へと静かに足を向けた。きっと何か出来る事があるはず。何かの役に立つはず。やればできるはずだ！

（2）

校舎の屋上、そのフェンスを越えた場所。一寸先は奈落の底。そんな場所に立っているのは、二人の少女。鈴子と可部井さんだ。

「ほら、危ないから。戻りましょ」

鈴子が柔らかく声をかけながら手を差し伸べて、一歩だけ歩み寄る。それに触れないように、可部井さんは無言のまま一歩下がる。

そんなやり取りが繰り返されて数分が過ぎていた。

同じく、屋上のフェンスの外側。丁度その角になっている部分で、僕は身を屈めて様子を窺っていた。

僕の眼下。校舎の下やその向こうのグラウンドでは、生徒や先生達が事の成り行きを見守っている。些細な動きがある毎に大きなどよめきの声を上げていた。

正直言ってかなりヤバい。何がヤバいのかって？下を見ると、足が竦んで動けなくなってしまいそうな事だ。

今すぐにでも戻りたい。

それでも、僕はそんな気持ちを抑えてここで待ち続ける事を選択した。鈴子に少しぐらいはいいところを見せたいから。そんな下心めいた気持ちだけが僕を踏み止まらせていた。

どよめき声。また一歩だけ彼女達が動く。

鈴子が可部井さんを一歩ずつこちらに追い込んでいる。後十歩も下がってきたら、後ろから飛びかかる手もあるだろう。ちょっと強引かもしれないが、鈴子に他の手があるとも思えない。力負けすることはないだろう。イケるはずだ。

しかし、思い描いたようには進まない。

「可部井さん、もう一度よく考えてみて！」

「そんな事して誰が喜ぶんだ！」

ようやく屋上に到着した数人の教師。それが、各々声を掛けはじめたのだ。これで、僕達はお役御免かと一瞬思ったが実際は違った。

教師達を見た可部井さんの表情が引き攣り、次の瞬間、飛び出そうとしていたのだ。

そう言えば、あまり大勢で押し掛けるのも重圧を感じて良くないと聞いた事がある。これじゃあ、逆効果になるのだろう。

などという思考をしている間にも、可部井さんはそこから飛び降りようとしていた。

――しまった！考えるより先に動くべきだった！

僕は後悔すると同時に案がえる事を止めて、飛び出していく。

「そっちはダメッ！」

僕が手を伸ばすよりも早く、鈴子が可部井さんの身体を捕まえて引き寄せようとする。

だが、可部井さんも抵抗をみせた。

「いやっ！近寄らないでッ！！」

鈴子に体当たりをかましてフェンスに叩きつけると、その反動でふら付きながら後ろに下がる。そして、足を踏み外し、その身体がゆっくりと空に吸い込まれてゆく。

「危ないッ！」

今度は僕が片手で可部井さんの腕を捕まえ、引っ張り戻す。そのままの勢いでフェンスに激突した。

「つぅ！！」

でも、大丈夫。その手は離さずにしっかり握られている。きっと、可部井さんは無事だろう。

「大丈夫？」

それでも、とりあえずは確認しておく。

「ん？」

よく見ると僕は胸元に可部井さんを抱き入れていた。左手で可部井さんの右手を握り、左手は何故か可部井さんの腰の辺りに廻され

ている。慌てて離れようとするが身体が思ったように動かない。思考回路もショート気味。如何したらいいのかわからなくなっていた。

超至近距離。鈴子もこんな風に抱きしめた事はないであろう。

僕の眼下には可部井さんのボブヘアー。それは、普段とは違う感じの髪型だった。マッシュルームレイヤーよりも全体的に丸みのありはねっ毛の多い髪型。こうしているだけほのかなシャンプーの香りが鼻腔をくすぐる。

いつもはもっと飾り気のないショートボブなのに、如何して今日だけこんな事をしてるのだろう？

「う、うん……」

鈴子の時とは打って変って、僕の腕の中にいる可部井さんは意外にも大人しかった。そして耳まで真っ赤にしながら、僕の胸ぐらに顔を埋めている。

こういうの、何て言うんだろうな？良くわからないけど、なんだかすごくいい感じなものだと思う。

だがそんな空気に浸る事もなく、鈴子の驚いたような表情を見て僕は一瞬で我に帰った。

「役に立っただろ？」

「そう……だね」

笑顔を作りながら声を掛けると、鈴子は何故か避けるように視線を外してしまうのだった。

それでもまだ暫く、僕達は抱き合ったまま動けないでいた。

＊

その後、可部井さんは教師達にセクハラかと思うぐらいにガッチリと身体を支えられながらフェンスの内側へも連れ戻される。

可部井さんは俯いたままでその足取りは重い。背中を押して貰っても、屋上から出て行こうとはしなかった。

「大丈夫か？」

などと教師が呼び掛けても可部井さんは黙ったままで、何を考えているのかは分からない。だが、これでひとまずの危険は去ったと思っていいだろう。

まだフェンスの向こうにいた僕は、ようやく肩の力を抜いて安堵の溜め息を付く。

「ありがとっ」

鈴子が僕の肩にポンッと手を置いた。

「いや、それほどでも」

「それにしても、長い事抱き合ってたけど？」

声の調子は変わらないが、引き攣り気味な表情から不満がある事

を伝わって来る。可部井さんと抱き合ったままだった事が気に入らないのだろう。

「い、いや……だって、離したら不味いだろ？」

「ふーん？」

「だから、可部井さんが離してくれなかっただけだって……うわっ！？」

不意の突風。それが彼女のスカートを全身全霊込めて捲り上げた。

「きゃ！」

彼女はそれを押さえようともせず、突風に負けないようにフェンスにしがみ付く。見えた物は、飾り気のない白のパンティ。普通で味気ない感じだが、そこが彼女らしいとも思う。

いやいや、じっくり見てる場合じゃないから！

咄嗟に彼女とは逆の方向に顔をそむけて、俺と鈴子の間を両手で隠した。僕は何も見てないぞ。うん。見てない。

しかし、それが失敗だった。その風が去ったと思った次の瞬間。再度、突風が僕達を襲った。しかも、前よりも強力な風。

背中から風に煽られると、僕の視界が激しく揺れる。

「うわわっ！！」

そのままバランス感覚を失った。その時になって、自分の愚かさに気付いたがもう遅い。

――落ちるッ

それは確信だった。これはもう、自力ではどうしようのない事態。

鈴子を目が合う。助けを求めるようにバランスを取るのに必死になっている腕を伸ばそうとする。しかし、鈴子はフェンスにしがみ付いたまま動けないでいた。

鈴子に助けを求めるのは早々に諦めて、視線を泳がした。しかし、他に助けてくれそうな人は見当たらない。

もう駄目だ――

やがて、堪え切れなくなった足が離れる。浮遊感。直後に待っているのは自由落下。

ここで僕の記憶は途切れている。これが最後の記憶だった。

最後の瞬間、僕は何を見ていたのだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2032ba/

僕が落ちて消えるまで

2012年1月6日18時48分発行